おんがく広場 第133号
令和3年(2021) 6月7日(月)
発行・クッキー会 発行責任者・加藤良一
Facebook,Twitterにも掲載／リンクフリー／御自由にコピーして下さい 令和2年(2020)4月10日創刊 連絡先 rkato@max.hi-ho.ne.jp

埼玉県合唱祭 直前に予定組み直し
28%が異例の出場辞退

6月6日(土)から始まった埼玉県合唱祭は、直前の5月28日付で埼玉県教育委員会から出された「**まん延防止等重点措置の再延長に伴う県立学校の部活動について(通知)**」により、出場予定の県立高校35校が一斉に欠場となりました。

これは県立学校が対象ですので、私立学校や中学校はほとんどが出場します。同じ学校でありながら、このような大きな違いが生じたことを生徒たちはどう受け止めるでしょうか。

欠場の穴を埋め、規模を縮小して開催

埼玉県合唱連盟では、6月2日付でタイムスケジュールの組み直しを発表しました。16校が欠場する6月12日(土)は10時半開会の予定でしたが、経費削減の観点から第1、2部を取りやめ開始時間を13時半からと変更しました。その時間帯に入っていた中学校3校には急きょ他の空いた時間へ移ることを要請しています。第3～5部は欠場団体の次の団体を前倒しする形で開催します。

同じく経費削減で6月13日(日)は第5～6部を取りやめ、その部に出場する7団体は別の日か当日の空いた時間帯へ移動するよう求めています。

6月6日(日)は、たまたま欠場が3団体のみでしたので、前倒しすることでさほど大きな変更には至りませんでした。われわれ男声合唱団コール・グランツは、第5部の2番目の予定でしたが、1番の慶応義塾志木高等学校ワグネル・ソサイエティ男声合唱団が私立にも係わらず欠場したので、われわれはトップとなりました。部ごとに全団体が揃っているのが原則ですから、時間が動いてもとくに支障はありません。

ないないづくしでぶっつけ本番！

控室がありませんので着替えは原則できませんが、揃いのドレスを着ていた団体もありました。おそらく近くに着替えられる場所を確保していたと思われます。まさかドレスで電車に乗るとは思えません…。またリハーサル室もないので、声出しもできずにまさにぶっつけ本番状態です(少なくも我々はそうでした)。ドレスで会場入りした団体は練習もしてきたかも知れませんが…。

大会及びその予選会に合唱祭は含まれない？

通知では、部活動は「課業日のうち2日以内、1回90分程度」とし、「運動部においては、全国高等学校体育連盟、日本高等学校野球連盟、日本中学校体育連盟、埼玉県特別支援学校体育連盟及び日本スポーツ協会に加盟する中央協議団体が主催する大会及びその予選会、**文化部においては、全国高等学校文化連盟及び各種連盟が主催する大会及び予選会に出場する場合は、大会当日から起算して14日前から「埼玉県の部活動の在り方に関する方針」※に基づく活動を認める。**」としています。期間は、まん延防止等重点措置実施期間が対象です。

※平成30年(2018)に制定された部活動の基本方針を定めたもの。

さらに通知では、活動全体に関して、「個別に行える基礎トレーニングや個人技能の習得、静かに行う文化活動などに限定し、**飛沫感染の可能性が高い活動(大きな発声や身体接触を伴う等)は行わない。**」と規定しています。これでは合唱はまるで許されない状況です。

参加団体 ついに30%に激減

昨年の埼玉県合唱祭は中止となり、今年はなんとか感染防止策を講じての開催となりましたが、直前の思わぬ中止措置により参加団体が激減してしまいました。因みに、2019年の参加団体数は250でしたが、今年の予定数は126と半減しています。不参加の理由はほとんどが練習自体ができていないことによります。

さらに126団体の中から35団体が辞退しましたので、実際の参加はほぼ2019年に比べて30%程度になってしまいました。これは合唱界にとって大変な危機です。もっとも恐れることは、中学・高校・大学の若い人たちが合唱の機会を奪われた結果、この年代層に空白が生じてしまうことです。また、一般の合唱団でも感染を恐れ、年長者中心に辞めてしまうメンバーが次第に増えており、そもそも練習場所もない状態では先細りの状態です。

危機は人間を進化させる…

いずれやってくるはずのポストコロナの時代は決して明るいものではありません。千葉敏行先生が運営するfacebookの公開グループ〔**ポストコロナの合唱活動を考えよう**〕や、その主旨をまとめた『**合唱の未来のために**』で力説されている以下の言葉をあらためて確認したいと思います。

ワクチン接種が概ね終わるだろう今年いっぱいの辛抱です(このようなメッセージを発信すべき合唱連盟は，適切な啓発活動ができていなかったとも言えるでしょう)。

辛抱と同時に，ポストコロナ，アフターコロナの合唱を見通して，冷え切ってしまった合唱活動を再び盛り上げるための戦略を練る必要があります。

この1年，わたしたちは大きな痛みを伴いながらたくさんのことを学びました。危機は人間を進化させます。危機感を共有し，連帯し，できることから一つ一つ丁寧に進めていくことによって，ウイズコロナの合唱を可能としてきたように，未来を見つめて歩んでいきたいと考えています。